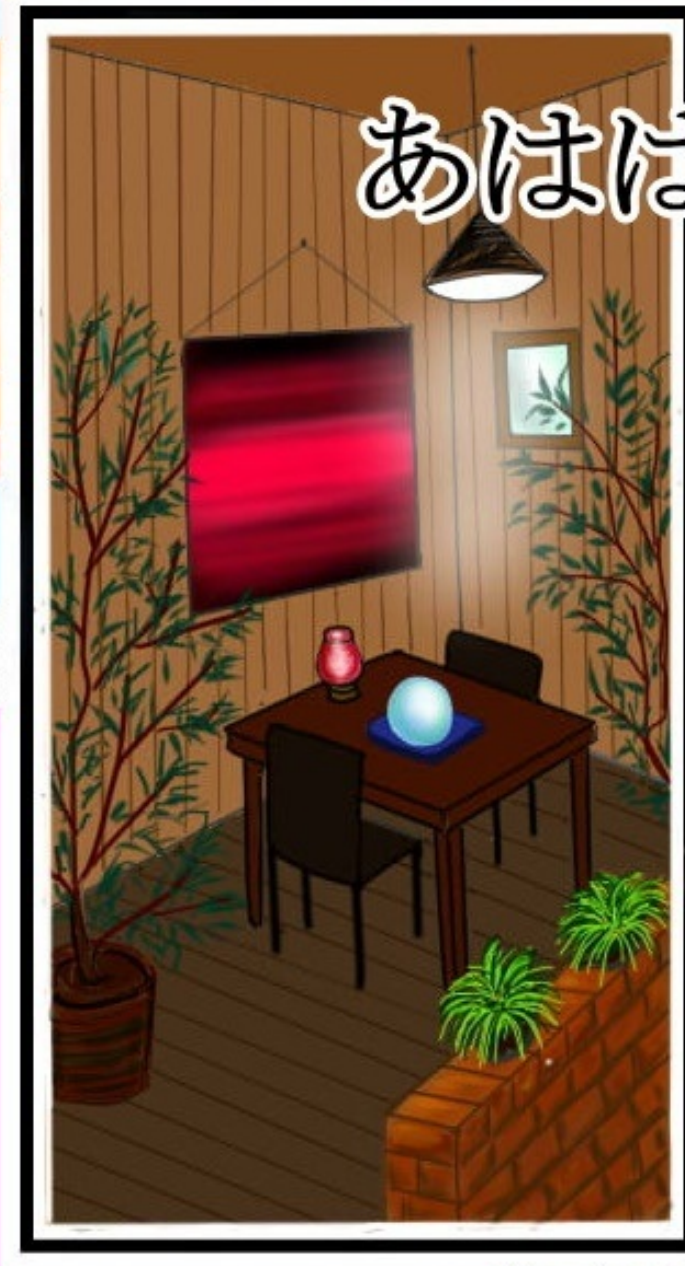
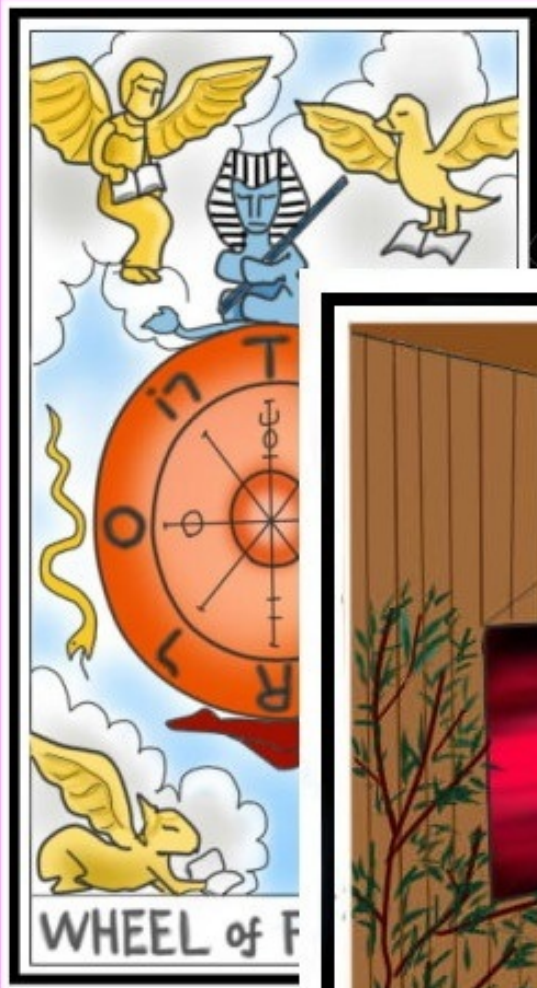


占いカフェの

片隅で

あはは☆るい



3

カフェのドアにかける営業中の看板が届いたのは、オープンの3日前だった。友里と真美の共通の友人、木下沙耶夏がお祝いにと作ってくれた。木のぬくもりが感じられる、カフェにピッタリの看板だった。

店名は「テンペスト」。

「ベートーヴェンのテンペストという曲が好きだから」と友里は言う。真美は「テンペスト!？」と、即座に聞き返した。シェークスピアの喜劇に『The Tempest』というのがあるが、日本語にすると『嵐』だ。友里はもちろん意味も知っていた。

「店名が嵐というのはどうかなあ。店内で波風が立ちそう」
「そうかな？嵐っていうグループもあるじゃない？私は気にならないわ。ねえ、真美はテンペストってピアノ曲は聴いたことある？ベートーヴェンのピアノソナタ。ドラマのBGMに使われたりもしてるよ」
「BGMに？有名な曲なの？」
「それなら聴いてみて。フジコ・ヘミングのテンペストがいい？私は辻井伸行のテンペストのほうが好きだけど」
「友里の好きなほうで」

心地よい音が、カフェの中を舞った。

「あ、この曲、お母さんが見てたドラマで流れてた」
「冬ソナ？」
「う〜ん、そうだったかなあ」
「ね、いい曲でしょ？」
「曲はよくても、店名にするのはどうかと思うけど」
「もう決めたから」
オーナーの友里がそう言うのなら、真美はそれでいいと思った。

「それから営業時間の事なんだけど、午前10時オープン、閉店は午後8時にしようと思うの。それでいいかしら？」

「友里が決めたのなら、私はいいよ」

「基本的には2人でやってくつもりだから、営業時間が長すぎてもバテるしね」

友里はもう1人ぐらいバイトの子を入れる予定にしていたが、バイトは当てにはできない。すべてに無理をしない、という方針で、真美もその意見には大賛成だった。

オープン当日。

張り切っている友里とは対照的に、

カフェでバイトの経験もない真美は、朝から緊張して何度もトイレへ通った。

午前10時5分前に、真美が営業中の看板を出しに行くと、

見るからに怪しげな雰囲気の人たちが、店の前で立っていた。

中でも特に、黒づくめの衣装の女が目立っていた。

衣装が目立つというより、妖気のようなものがユラユラと漂っていた。

女は真美に「もう中に入ってもいいかしら？」と聞くと同時にカフェのドアを開けた。

女に続いて、残りの怪しげな人たちも店の中に入った。

「こんにちは」

「わあ〜！来てくれたの？ありがとう」

真美がいぶかしげに見ていると、友里が手招きした。

「真美、ほら、前に話した占い師さん。このお店を手伝ってもらう予定だった人」

占い師らしいファッションだ、と真美は思った。

でも、この人は占い師を辞めたはず。そして結婚したはず。

なのにどうして、占い師のようなファッションなんだろう？単なる好みかもしれない。

元占い師の横にいる女は、髪の毛が長く、大きなネックレスを付けていた。

もう1人は普段着なのか、仕事着なのか分からないが、ドレスのような服を着ていた。

残る1人は男で、ベレー帽をかぶっていた。

全員、占い師だろうか？

そうでなければ、怪しすぎるグループだ。

真美が初めてのオーダーを受けていると、次のお客がドアを開け、それからは、次から次へとお客がやってきた。

友里は占い師の女と話をしたそうだったが、世間話などする暇がないほどお客がやってきた。ついには、座る席がなくなり、怪しげな集団も、ゆっくり長居する雰囲気ではなくなった。

「また来るわ」
黒づくめの女は、忙しそうな友里にひと声かけると、「おつりはいらさないから」と、1万円札を置いて帰った。

ランチタイムには、真美が勤めていた会社の同僚が来店した。日曜は会社も休みなのに、わざわざ来てくれたことに、真美は少なからず感激した。会社を辞めても真美は幸せなのか？同僚たちの視線は真美を追っていた。ゆっくり話している暇がなかったことは、真美には幸いだった。

友里はカフェのオープンを知らせる新聞折り込みを入れたと言っていたが、その効果もあってか、カフェは大盛況だった。

客層は、子どもからお年寄りまで幅広かった。友里が思い描いた「お1人様でもゆっくりしていけるカフェ」にしては、にぎやか過ぎる感じもしたが、お1人様で来店したお客は「また来るよ」と言ってくれた。

友里の入れるコーヒーは好評で、おかわりをする人もいた。この調子なら、売り上げは満足できるものになりそうだが、連日大盛況だと、真美は体がもたないと思った。

友里は飲み物から軽食まで、すべて1人で手際よく作った。よそで修行してきただけのことはある。真美は口には出さなかったが、友里を少し見直していた。

オープンから休み無しで働いた1ヶ月。
想像していたより大変で、心配していた割には楽しくて、
思ったより給料は良かった。

「真美、ありがとうございました」友里は深々と頭を下げ、真美に給料袋を渡してくれた。
「わー、給料袋だ。振り込みでなく現金でもらうと、働いた実感が湧くね」
「重みが出るように、千円札多めに入れといたから」
それは半分冗談で、半分本当だった。
給料袋にお金を入れる際、手元にあった1万円札が少し足りなくて、
おつり用に用意していた千円札を、20枚ほど入れたと友里は言った。

給料袋を開けてみると、OLの時より多かった。
でも、この中から税金を支払わなくてはならない。
ボーナスは出ないから、それも頭に入れておかないといけない。
そう考えると、OLのほうが収入は良かった。

「テンペストか...」
この1か月、真美にとっては、まさしく『嵐』のように時間が流れた。
初めての接客業で、戸惑うこともあったが、
それほど酷い態度のお客もおらず、泣くような出来事は起こらなかった。
1日中、体を動かすせいか、夜はぐっすり眠れた。

テンペストという店名も、次第に定着して、
「今日、テンペ行く？」と誘い合って来店してくれる常連客も出てきた。
ランチタイムは、相変わらず目が回るほど忙しかったが、
昼下がりに、交替で昼食を食べる時間も取れるようになった。
少し気持ちに余裕ができたせいだろうか、友里が独り言のようにつぶやいた。
「そろそろ占いも。なんてね」
真美は聞えないふりをした。

友里はカフェで占いをすることを、あきらめてはいなかった。

カフェの片隅に置かれたテーブルや椅子も、占い師の登場を待っているかのように見えた。

オープンから1か月が経ったが、

「あそこで占いでもやる予定ですか？」と聞かれることも時折あった。

真美が「申し訳ございません。占いはしておりません」と答えると、

「ご要望が多ければ、占いをすることも考えています」と友里が訂正した。

その日は、近くの高校がいつもより早く授業が終わったのか、

女子高生たちがスイーツ目当てに続々とやってきた。

友里手作りのコーヒーゼリーやクレープは、350円と値段も安く、高校生にも人気だった。

夕方になり、やっと客足が落ち着いたころ、4人グループの女子高生が来店した。

コーヒーゼリーは売り切れだと聞くと、「え〜、楽しみにしてきたのに」と口をとがらせていたが、

「クッキーをサービスするから許してね」と友里が言うと、すぐにご機嫌は直った。

それぞれに飲み物を注文し終わると、その中の1人の女の子が真美に聞いた。

「あのテーブルと椅子が気になってるんですけどお、なんかあ、占いとかもやってそうな気がしてえ」

なかなか鋭い。

女の子たちは「それなら占ってほしいよねえ」「私も興味あるう」と口ぐちに言った。

真美がいつものように答えようとした時、

ふいに、女子高生の後ろのボックス席に座っていた男が立ち上がった。

「僕で良かったら占ってあげようか？」

「え——！」「うそ——！」

真美も女子高生と同じ気持ちだった。

男はごく普通のサラリーマンという風貌だった。

メガネをかけた細身の男で、イケメンとは言えないが嫌味はなかった。年齢は35歳前後だろうか。

どう答えていいのか真美が迷っていると、カウンターの中から友里が嬉しそうな声で言った。

「あそこの隅のテーブルと椅子を使って。あっ、鑑定料はおいくら？」

「友里ちゃんの店だから安くしとくよ。10分、500円でどう？」

女子高生たちは「5分なら250円ですか？」と聞いている。占ってもらおう気満々だ。

男の話ぶりからすると、友里の知り合いのようだ。
プロの占い師なのか、素人に毛が生えた程度なのか？

「占ってあげようか？」と言われた女子高生たちは、
「300円で占ってくださいよお〜」「学生割引してくださいよお〜」と言いながら、
カフェの片隅で出番を待っていたあのテーブル席へ移動した。
椅子が1つしかないため、占ってもらう子が座り、あとの3人は周りに立っていた。

友里があわてて休憩室から丸椅子を3つ持ってきた。
休憩室は、ゆったりした広さではなかったが、取りあえず着替えはできた。
友里と真美と交替で、お昼ごはんもここで食べていた。
丸椅子は2つあれば事足りるが、なぜか4つ置かれていた。
まさか予備の丸椅子が、こんな時に役に立つとは、思ってもみなかった。

占いが始まると、先ほどのにぎやかさとは打って変わって、女子高生たちは静かになった。
4人で顔をくっつけるようにして、男の話を聞いている。

「えっと、クラブの先輩のことなんですけど、先輩には好きな人がいて...」
まだ結婚なんて考えなくてもいい年齢。
相手の収入がいくらだとか、家柄がどうのとか、そんな事はまるっきり考えなくていい。
だから、質問も可愛いもんだ。

ひとり10分と言われた女子高生たちは、律儀に腕時計で時間を計って、
「もうすぐ10分だよ」「はい、交替」と、順番に占ってもらっていた。
それぞれの占いが終わってからも、女子高生たちは神妙な顔で追加の質問をしていた。

「はい、今日はここまで」
キリがないと思ったのか、男が終わりを告げて、占いは終了した。

「良かったね、占いまでしてもらえて」「500円ならお得だよ」「ホント、来てよかったよ」
占いが終わると、女の子たちは、またにぎやかな女子高生に戻った。

「ね？やっぱりあのテーブルは占いが似合うでしょ？」
友里がしたり顔で言った。

「もしかして、真美はあの人のこと憶えてないの？」

オープン初日に来たじゃない。ベレー帽をかぶってた人よ」

そう言われて真美はやっと思い出した。

友里の知り合いの占い師と一緒に来た男だ。

ベレー帽をかぶっていないせいか、1人で来店したせいか、怪しい感じはしなかった。

でも、平日のこんな時間に、普段着でカフェにきて、女子高生相手に占いをしているのだから、土日が休みのサラリーマンではなさそうだ。真美は食器を洗いながら、男の顔をチラ見した。

女子高生たちが帰ったあと、友里は占い師の男と楽しそうに話していた。

カウンターの中で食器を洗っていた真美は、2人の会話がよく聞こえなかったが、

きっと友里は、あの男にカフェでの占いを頼むに違いない、と思った。

そうなれば、真美が占いをする、しないで、友里ともめることもなくなる。

男が帰ると、客足がしばし途絶えた。

「友里、良かったね。占い師が見つかった」

「何言ってるの、違うわよ。今日は特別に占ってくれたの」

「プロの占い師さん？」

「プロとして活躍できる力は持ってる人よ。でも、占いで儲けようとは思ってない。

ご実家が自営業で、跡を継ぐ人だからね。

あの人がこの店で占いをしてくれたら、真美も助かるのにね。残念でした～」

友里はいたずらっ子のような顔をした。

「あら、コーヒーカップ、漂白してくれたのね」

綺麗になったコーヒーカップを、友里は愛おしそうに見つめている。

「占いの様子を見て、真美はどう思った？女の子たち、楽しそうだったでしょ？」

「そうね。でも、占いの結果がハズレたら怒るでしょうね」

「真美ったら失礼ね。あの人の占いはハズレたりしないわよ」

「あ、ごめん」

「万が一、ハズレたとしても、誰も怒ったりしないわ。

占いはね、当たりハズレじゃなくて、その時の不安をぬぐってもらうものだから」

「彼女たちはそうかもしれないけど、もっと重い内容の相談なら？生死が関わるような...」

「重い相談？私が占い師なら、そういうのはお断りするわ」

友里は何事もネガティブな方向には考えない。

「真美は細かい事ばかり気にしすぎなの。
もっと気楽に考えたほうが楽しいよ。占いも人生も！」
真美は痛いところを突かれてイラッとした。
「友里が気楽すぎるのよ。そのほうが人生は楽しいかもしれないけど」
「おかげさまでー」
「あー腹が立つ。そういう言い方がムカつくのよ」
「怒っちゃやーよ」
「占いのことで私に期待するのはやめて」
「私は期待してるよ。真美には素晴らしい能力があるんだもん。その能力を生かしてほしいわ。
さっきの質問だけど、もしも真美がこのカフェで占いを始めたとしても、
こんなに明るいカフェで、ドロドロした悩みを相談する人なんていないと思う」
友里は占いをあきらめるつもりはなさそうだ。

カフェで占いなんて絶対にやらない。
真美が改めてそう心に誓った翌日のことだった。

「占いをやってるんですね？」
真美がお水とおしぼりを運んで行くと、いきなり聞かれてドキッとした。
「すみません。当店ではそのようなことは...」
「やってないの？なんだ損した。車を30分も飛ばしてきたのに」
真美は「すみません」としか言えなかった。お客はアラフォーと思われる女性客2人。
「カフェの片隅に占うブースがあるって聞いたから、わざわざ来たのにね」
真美は自分が悪いような気がして、もう一度「すみません」と言いかけて、
ふとそのお客と目が合った瞬間、自分でも無意識に、
「危ないブレーキ！」と言っていた。
「何よあなた！ 頭おかしいんじゃない！？ 失礼ね」
クリリンの時と同じだった。
確かに真美は「すみません」と言おうとしていたのだ。
それなのに、口が勝手に「あぶないブレーキ」と言ってしまった。

「すみません。今朝、交差点で犬が飛び出したのを思い出してしまって」

真美はとっさに思いついた言い訳をして頭を下げた。

「変な人。急にそんなこと思い出す？」

「すみません」

向いに座っていた連れが「そんなに怒らなくても」と、とりなしてくれたが、

女の声はやたら大きくて、カフェ全体に険悪な雰囲気漂った。

真美とお客とのやり取りを聞いていた友里は、「お会計の時、これを差し上げて」と、

お手製のクッキーを可愛い袋に入れて、真美に手渡してくれた。

「遠くからおいで頂き、ありがとうございました。これに懲りず、またお越しくださいね」

恐る恐る真美がクッキーの袋を手渡すと、

「あら、いいの？ありがとう」女は笑顔で受け取った。

ちょっとした心遣いが人の気持ちをほぐすものだ。

「このお客様が安全に帰れますように」

真美は祈った。無理な運転はしないで、と強く願った。

なぜそう思うのか、自分でもよく分からなかったが、真美には祈ることしか出来なかった。

そのお客が再び来店したのは、なんと翌日のことだった。

ランチタイムが終わり、ティータイムに入ったため、友里が先に昼休憩を取っていた。

この時間帯は、飲み物を頼むお客がほとんどで、真美ひとりでも対応できるのだ。

「いらっしやいませ。あっ」

「良かった。あなたに会いに来たのよ。昨日はごめんなさいね。

あなた、私の顔を見て『危ないブレーキ』で言ったじゃない？

なんだか気持ち悪くて、帰りは制限速度を守って運転したわ。

まだ半世紀も生きてないのに、事故で死ぬなんて嫌なもの」

「すみません、失礼なことを申しまして」

「いいのよ、私はお礼を言いに来たんだから」

「え？」

真美は何を言われているのか理解できず、目をぱちくりさせた。

「まあ聞いてよ」

女は真美の腕をバシッと叩いた。怒っているのではなく、友好的なりアクションだ。

真美はよろけそうになったが、ぐっと踏ん張った。

「昨日ね、見通しの悪い交差点で、信号が青から黄色に変わりそうなタイミングだったの。

普段なら、アクセルを踏み込んで通過するところだけど、

あなたに言われたことが気になって、私はブレーキを踏んだ。

そしたらね！その瞬間！」

女はまた真美の腕をバシバシ叩いた。

「交差点の左側から、すごい勢いで車が突っ込んできたの。

もう驚いちゃって。信号無視もいいところよ。

あの時、ブレーキを踏まずに直進していたら、私は今、ここにいないと思うわ。

あなたが変なこと言ってくれたおかげで、私はこうして元気なわけ」

女は真美の手をすごい力でぎゅっと握った。

真美のびっくりした顔に気付いたのか、女はすぐに力をゆるめた。

「思わず力が入っちゃった。アッハッハ」女は豪快に笑った。

2人の様子を静かに見ていた女の連れが、

「ありがとうございました」と頭を下げた。

2人は友達だろうか？真美の疑問がテレパシーのように通じたのか、

「私たち姉妹よ。私が姉。こっちが妹。見たら分かると思うけど」

女は妹の肩をにバンッと手をのせた。

「そうなんですか...」真美は曖昧に返事をした。

2人は雰囲気も顔立ちも、全くと言っていいほど似ていなかった。

まあそんな事はどうでもよかった。この姉妹が無事で良かったと真美は思った。

休憩室から戻った友里は、途中から真美とお客のやり取りを聞いていた。

「ホットふたつ」

真美がオーダーを伝えると、友里は小さな声で言った。

「やっぱり真美には霊能者の素質があるね」

真美が黙っていると、友里はそれ以上は何も言わなかった。

『テンペストというカフェには靈感のある店員さんがいます。

私はその人に助けられました。』

真美はため息をついた。あの女に間違いない。

友里が『カフェ テンペスト 評判』と入力して検索すると、個人のブログがいくつかヒットした。

その中の1つ、『カアちゃん喫茶店をめぐる』というブログには、

真美があんな女から聞いた話が、少し誇張した形で書かれていた。

コメントもいくつか入っていた。

『私もそのカフェへ行ってみたいです。どこにあるのか教えてもらえませんか？』

『霊視鑑定ですか？』『予約は必要ですか？』

それらの問いに対して、女の返信コメントはこうだ。

『お店のホームページをリンクしておきます。詳しいことはお店に直接聞いてね。

おもしろいよ～。ぜひ行ってみて！』

コメントを読んで、友里はクスクス笑っている。

「ねえ、『おもしろい』ってのはどういう意味かしら？真美の反応がおもしろいのかな？」

真美はこのブログから妙な噂が広がらないことを祈った。

噂というのは広がるだけでなく、元の話がどんどん膨らんでゆく。

高校の時に、散々噂に振り回された真美。

情報は昔とは比べものにならない速さで伝わっていく。時には国内にとどまらず、世界にまで広がる。

発信する側も受け取る側も、もっと注意深くなってほしい。

真美がそんな事を考えている隙に、友里は真美に成りすましてコメントを書いていた。

「フッフ、書き込んでみたよ。ほら」

『先日は占いカフェ、テンペストにご来店いただき、ありがとうございました。

靈感ウエイトレス真美がお待ちしています。コーヒーもおいしいよ♪ 』

「ちょっと、勝手なことしないでよ、何が占いカフェよ！早く削除して！」

真美は半泣きになっていた。

友里はのんびりした声で、「はいはい、分かりました～」と言いながら、

パスワードを入れて、書き込みを削除した。

友里が書き込みをしてから削除するまでの時間は、ほんの数分のことだ。

その短い時間に、このコメントを見た人がいた。

それは真美が良く知っている人物だった。

高校のころ、真美の噂を広げた張本人、大和美穂だ。

大和美穂が、『テンペスト』に来店したのは、

友里がブログに書き込みした1週間ほど後の昼下がりだった。

「こんなことってあるのね。私ね、ブログを読んだ瞬間、これは浅井真美だ！って思ったわ。

でも、コメントを書き込んで消したのは真美じゃないわね。そうでしょ？」

美穂は高校のころと、全く変わっていなかった。

顔も体つきも、声の大きさも。美穂はクリームソーダを勢いよく吸った。

「あのブログはね、私の従妹が書いてるのよ」

「従妹？ああ、そう言われたら、どこことなく似てるわ」

「やめて～、似てないわよ！」

美穂は真美の腕をバシッと叩いた。

「こうやって人をバシバシ叩くところも似てる」

「癖まで遺伝子で決まるの？やだ～」

「美穂に会ったの何年ぶりかな？高校卒業以来だね」

「私は大学に通う真美を何度か見かけたよ」

「ウソ！？」

「ホント。私はすぐに気付いたけど、真美は全く気付いてなかったよね。

私さ、真美の大学の近くにある専門学校に通ってたんだよ」

「専門学校？美穂は関西の大学に行ったんじゃないの？」

「大学も受かったけど、行きたい大学でもなかったから。親はがっかりしてたけどね」

「私に気付いた時、どうして声をかけてくれなかったの？」

「声をかけたくなかったのよ。昔の自分とは違う自分になりたかったから。

メイクも服装も派手にして、きらびやかな自分になりたかった」

「でも今日は私に会いに来てくれたのよね？」

「従妹が会った靈感女が本当に浅井真美か、確かめに来たの。それと、ちょっと謝りたくて」

「謝りたいって、何を？」

「真美は大学でも、占い師のようなことをさせられてたでしょ？」

そう言った原因は、たぶん私よ」

「えー！！」

「ごめん。噂を流すつもりはなかったのよ。結果的にはそうなってしまったけど。専門学校の友達の友達が真美と同じ大学で、彼のことでとっても悩んでたの。私は少しでも力になりたいくて、浅井真美という子に相談してみたら？って言ったの」「でも、私のところに占い目的で来た人は、美穂から聞いたって言ってなかったよ」「それはね、私が念を押したから。もしも私の名前を出したら、絶対に占ってもらえないよって。

私は浅井真美に嫌われてるからって」

「ひどい」

「だからごめんって言ってるじゃない。

それに、浅井真美に靈感があることは、ここだけの話だよって、皆には念を押して・・・」

真美は美穂の話最後まで聞かずに言った。

「あのね、ここだけの話っていうのは、誰かにひそかに伝えてね、と同じ意味なのよ」

「アハハ、真美のその理屈っぽいところ、高校のころと変わらないね」

「美穂も変わらない。ぜんぜん変わらない」

真美は怒りがふつつつと湧いてきて、口元がかすかに震えた。

美穂は何を思ったのか、「ほら」と1枚の写メを真美に見せた。

「これ、専門学校時代の私。今とはぜんぜん違うでしょ？」

そこに写っていたのは、髪の毛が金髪で、目の周りが真っ黒で、どう表現していいのかわからない、妙ちくりんな服を着たギャルだった。

「笑うでしょ？でもあのころは、これがカッコイイと思ってた。私もいろいろあったのよ」

美穂はもう1枚写メを見せてくれた。

「この服さ、私が作ったの。学校内のコンクールで賞も取ったのよ」

美穂は自慢げだった。

その服を言葉で言い表すのは難しいが、しいて言うなら、クジャクの羽のような色をした服。

「世界的なファッションデザイナーになろうと思ってたの私。

夢破れて、こうして真美のカフェでクリームソーダをすすってるけどね」

真美は黙っていた。

美穂はクリームソーダを飲み干すと、オッサンのような声色で、「ふ～。クリソおかわり！」と言った。

真美は怒っていたのに、思わず笑ってしまった。

「ところでさ、クリリンのことだけど、憶えてる？」

「担任だったクリリン？」

「私、見たの」

「見た？クリリンを見たってこと？」

「うん。卒業旅行で行ったシンガポールで。観光バスのガイドやってたのよ、クリリン」

「クリリンがバスガイド！？シンガポールで？」

「私も目を疑ったわ。他人のそら似かな？と思ったけど、声をかけたの。

『栗山先生ですか？大和美穂です。高校でお世話になりました』って」

「そしたら？」

「クリリンは言葉が出なかった。そりゃそうよね。あんな辞め方したんだから。

真美はクリリンの最後の授業を憶えてる？男子がサングラスかけてさ」

「憶えてるよ。『先生がまぶし過ぎてサングラスを外せません』でクリリンをからかって」

「そうそう。私さ、クリリンに会った時、サングラスかけてたんだよね。

だから言ってやったの。『先生がまぶし過ぎてサングラスを外せませーん』ってさ」

「そんなことよく言えたわね」

「まあね。私は嫌味を言ったつもりだったのに、クリリンは吹き出して、私もつられて笑った」

「美穂の言い方がおかしかったのね」

「そうみたい。私、お笑い芸人になれるかも」

「で、先生に何か聞いた？」

その時、カフェのドアが開いた。

「いらっしゃいませ〜」

「ごめん、お客様だから行くね」

美穂の話のをこれほど聞きたいと思ったことは、過去に1度もない。

客足というのは、時として波のようだ。

一気に押し寄せたかと思うと、サーッと引いてしまうこともある。

いつもはさほど混まない時間帯なのに、こんな時に限って次から次へとお客はやってきた。

美穂は何冊かの雑誌に目を通すとレジへ向かった。

「ごめんね、急に混んできて。話を聞きたかったのに残念だわ」

「嬉しいことじゃない。お店が忙しいのは」

「まあね」

「真美はすごいよ、こんなカフェをやるなんて」

真美は心臓がトトと音を立てたような気がした。

「私はただのパートなの」

美穂はばつが悪そうな顔をした。

「でも楽しいよ。パートでもね」

「それならいいけど。うん、そうだね、パートのほうが気楽でいいよ」

美穂は「そうだ、うん、そうだ」と言いながら、真美の腕をバシバシ叩いた。

「痛いよ、もう」

真美は美穂に良い印象を持っていなかったが、こうして久しぶりに会ってみると懐かしかった。

「また来てね。必ずよ」

「うん、分かった。続きは次回のお楽しみ」

美穂が歩くと靴がペタペタ鳴った。勢いよくドアを開けて、美穂は帰って行った。

美穂は近いうちに来店してくれるだろうと真美は思っていた。

お喋りな美穂のことだから、クリリンのことを真美に話したくてうずうずしているはずだ。

ところが、美穂の代わりに、美穂の従妹だというあの女が来店した。

「今日はおひとりですか？」

「そうなの。妹はちょっと忙しくてね」

「どうぞごゆっくり」真美が立ち去ろうとすると、

「あ、そうだ、あなた美穂の友達なんですか？これ、美穂から預かってきたわ」

女は茶封筒を真美に渡した。

「あのお、美穂はどうしてですか？」

「元気よ。あの子は元気を取り柄のようなものね。昨日から海外よ」

「海外？」

「あら、知らなかったの？」

「仕事ですか？」

「仕事？違うわよ。あの子は今プー太郎だもの。

せっかくい会社に入ったと思ったに、すぐに辞めちゃうんだから、まったくもう」

「それなら、旅行ですか？」

「フラッと気分転換じゃないの？シンガポールで3、4日ふらふらしてくるって」

シンガポールと聞いて、真美はドキッとした。美穂はクリリンに会いに行ったのだろうか？

美穂からという茶封筒の中身は、数枚の写真だった。

シンガポールのマーライオンや植物園が美しく写っていた。

そして最後の1枚に写っていたのは、クリリン。

クリリンの写真を見て真美は驚いた。

これほどいい顔をしたクリリンを見たことがなかったから。

青い空。綺麗な街。

クリリンは日本を出て初めて、自分の居場所を見つけたのかもしれない。

真美がコーヒーを運んで行くと、美穂の従妹が声をかけてきた。

「今日の私はどう見えるかしら？」

真美が困った顔をしていると、

「この間のように、思ったことを言ってみて。ほらよく見ていいのよ、私の顔を」
女は真美のほうにグイッと顔を近づけた。

「すみません。何か勘違いなさっているようですが、私に霊的な能力はありません」
にこやかだった女の顔が、ムツとした表情に変わった。

「あなた、嘘つきね。本当は分かるくせに。美穂から聞いているわよ」

真美は心の中でため息をついた。

『なぜ美穂は、私の人生を霊視や占いと結びつけてしまうんだろう・・・』

クリリンの話が聞きたくて、美穂に早く会いたいと思っていた真美だったが、
しばらくは誰とも会いたくない気分になってきた。

しかし、カフェで働く以上は、お客を選ぶことはできない。

真美はゆっくり息を吐いて気持ちを落ち着かせた。

「美穂さんも私のことを勘違いなさっているようです。お力になれず、申し訳ありません。
本日は店長手作りのアップルパイがお勧めです。よかったらいかがですか？」

女は「なにさ、ふんっ」というような顔をしたが、アップルパイには興味があるようで、
「それ、いただくわ」と言った。

友里は占いで人の心が癒されると思っているが、

美味しい物と、ゆったりした空間があれば、このカフェに占いなど必要ない。

もうこんなことで振り回されるのはこりごりだと真美は思った。